

岸邊成雄君の「唐代音樂の歴史的研究 樂制篇 上卷」に對する授賞審査

要旨

唐代の音樂は中國音樂史上最も重要な地位を占め、しかもわが國雅樂・散樂等の源泉をなすものであつて、わが音樂史上またその研究のゆるがせにしてはならないことは改めていう要もない。岸邊成雄君著「唐代音樂の歴史的研究（樂制篇）」は上下二卷から成り、上卷には序説五章、各説第一章より第三章に至る三章を収め、各説第四章以下第七章までの四章は近々出版の予定である下卷に載せられることとなつてゐる。序説は唐代以前の樂制に筆を起し、秦漢以來中國音樂が雅樂、俗樂の二種に分かれ、雅樂は儒教の禮樂思想に基づく郊祀・廟祭の舞樂として用いられ、俗樂は雅樂を除く一切の樂舞で、二者共に宮廷貴族の間に行なわれ、いずれも文教の府たる太常寺の管轄に属したが、南北朝に至つて龜茲・西涼等外來音樂の影響を受け、遂に隋代に及んで雅樂の外に外邦諸樂をもつて構成される九部樂が宮廷の燕饗の席に採用され、外邦樂工の寵用されたものも少なくなつたことを述べ、さらに唐代に入り、初唐においては雅樂は勿論、燕饗樂が大いに整備されて十部伎の制定を見、太常寺所屬の樂工の組織などに複雑さを加えて来たこと、中唐においてはその特徴として雅・俗・胡三樂が融合し、そして樂制の中樞が太常寺よりむしろ新設の教坊と梨園とに移つたことをあげ、なお雅・俗・胡三樂の融合による燕饗樂が、玄宗朝立部及び坐部の二部伎に分かれ、形式は雅樂であるが、内容に俗・胡の二樂を盛り、古式を墨守する雅樂はここに至り一転して典禮的燕饗樂として發展し、左右教坊及び梨園の新設によつて男女樂人の訓練、樂器の發達等唐代音樂の黄金時代を現出したこと、而し

て末唐に至ると教坊や梨園はとみに衰退し、初唐以来の太常寺樂制すら縮小を重ねたが、その半面民間における音楽活動が開始され、宋代庶民音楽(戯劇)の勃興への胎動となり、これを音楽の様式について見ると、十部伎や二部伎の如き大規模の国家的行事は次第に衰微し、繊細な室内楽や巧緻な琵琶独舞と歌曲への転化を見、又散楽中の演劇的要素(歌舞劇)が発達して俳優伎が宮廷にも盛行し始め、宋代雜劇の前駆をなしたことを述べている。なお唐代には官私数種の妓女があつて各階級の宴席に侍したが、都市商業の繁昌につれ妓館が組織され、長安平康坊の北里を始め、妓館の音楽は宮廷貴族のそれと相影響し、ますます庶民的芸能の活躍を促した。これら妓館は経営者たる假母、使用人たる妓女、並びに営利の対象である華客から成るが、妓女には容姿の外に才氣が名妓たる資格として要求され、華客も多くは士人階級であり、妓館はかくして高踏的社交的壇場となり、同時に假母の苛酷な行為が続出し、軽薄不良の徒が出入し、いわゆる「不測の地」として暗黒世界を作っていたこと等を説いている。著者はなお唐代以後の中国音楽にも言及し、唐代音楽の主流が宮廷貴族の独占的に享受する大舞樂から、商業都市の民衆の間に広まった妓館での歌舞や劇場での雜劇へと移動し、また外来音楽を摂取したいわば國際的音楽から、内在的に民族色を発揮した国民音楽への転改であり、宋の雜劇も元の元曲も明の崑曲もないしは清の京劇も、つまるところいづれもここに淵源を発するものであることを論じている。各論はそれぞれ事項を分かつて太常寺樂工・教坊・梨園・妓館・十部伎・二部伎並びに太常四部樂について、その沿革・組織・性格等に関し、唐代および唐前後における基本的音楽史料は勿論、小説隨筆等に散見する零細な記録を蒐集して精密な考証を行ない、殊に太常寺樂制は唐代樂制の基本をなすものであるので、樂工の身分・待遇等に至るまで本書の一六八頁を費して縷述している。

本書中著者論考の最も顯著なもの二三を摘挙すると、太常寺樂工は音声人・雜戸・樂工・官戸及び官奴婢の五階級から構成されたものであるが、著者は従来極めて不明確であつたものを唐律疏議・唐六典等に散在する資料を結合してその性格を明らかにしたこと、教坊の組織や実状については唐代の資料のみではとかく不完全を免かれなかつたが、著者は宋史樂志・宋会要稿等によってこれが補足をなしたことが、玄宗朝に置かれた梨園は太常寺から精選された坐部伎の樂工を主体とし、これに教坊その他から拔擢した優工才妓を加えて組織したものであつて、唐代音樂の精華というべきものであること、太常寺四部樂は唐代の基本的音樂史料に見えず、わずかに北宋王應麟の玉海などにその名称のみを記すに過ぎないため、その内容が後世に忘れられていたが、著者は玉海所引唐實錄・新唐書崔郾傳・同南詔傳・唐段安節撰樂府雜錄・宋史樂志等によってその内容を復原したこと等すでに忘れかかつた唐代音樂の実態を再現することに力を注いだ。また玄宗朝に前代の諸曲と玄宗の新曲とを合わせた十四曲を立部伎八曲及び坐部伎六曲の二部に分かつたものであるが、その史料の不備であるところから、従来ややもすると中国やわが国の學者から、或は唐樂全体の二分されたものとされ、或は十部伎の二分されたものとされていた誤解に対し、著者はその是正につとめたのである。

要するに、著者は昭和十一年東京大学文学部東洋史学科卒業以来二十五年にわたり、あまねく中国音樂に關する文献を渉獵し、これに嚴密な批判を加え、ここに前人のいまだ成就し得なかつた唐代音樂の綜合的研究を達成したのである。なお著者は中国および朝鮮に赴き古樂器を採訪し、一方わが奈良正倉院並びに宮内庁所伝の樂器・樂曲等の調査を行ない、文献的研究にさらに一層の確實性を加えたのである。本書は主として文献によって唐代の樂制について

研究したものに外ならないが、著者にはなお未刊の楽曲・楽理・楽器・楽人・楽書の諸篇があつて、逐次その公表が計画されている。本書は著者の研究成果としてはその一部に過ぎないが、けだしその中枢をなすものであつて、これによつて他日上梓される諸篇の内容如何をも卜するに足るものと信ずるのである。